

まえがき

1989年に日本で初めてTEACCHプログラムの「教師のためのトレーニングセミナー」を東京と大阪で各5日間、朝日新聞厚生文化事業団が開催しました（安田生命社会事業団共催）。このセミナーは、アメリカ・ノースカロライナ州のTEACCH部スタッフを招き、現地で行われているセミナーをそっくりそのまま日本で開こうというものでした。このとき参加した受講生たちの新鮮な驚きと感動は、大きなものでした。それまでの自閉症の人たちに対する対応が、いかに足りないものであったかということを思い知らされたと、このとき参加した何人の受講生たちが感想を口にしていました。このTEACCHプログラムのセミナーは、1992年に同じく東京と大阪で開いたものと合わせて、日本の自閉症療育の現場に少なからず影響を与えたものとなりました。これらセミナーを受講した多くの実践者が、現在も全国各地で活躍しています。このガイドブックの執筆者である藤村さん、内山さん、諫訪さんの3人も、実はこの第一回目の東京会場での受講生です。

TEACCHプログラムを日本で実践し、さらに広めるために、私たちは1992年から毎年2人ずつ、1年間の研修留学生をTEACCH部の協力を得て現地に派遣しました。1992年は藤村出さん（神奈川・東やまた工房：当時）と服巻智子さん（佐賀大学附属養護学校：当時）。1993年に安倍陽子さん（安田生命社会事業団子ども療育センター：当時）と諫訪利明さん（神奈川・県央療育センター）。そして1994年には内山登紀夫さん（東京都立梅ヶ丘病院：当時）と鈴木伸五さん（北海道・おしまコロニー：当時）の合計6人です。彼らは、それぞれ全国公募の中から選考されて派遣されました。このガイドブックは、その6人による現地での研修報告ならびに帰国後の実践報告書です。

報告書にしては研修終了から少し時間が経過しています。しかし、それだけに現地での研修成果を帰国後の実践へと反映させ、「日本でTEACCHプログラムをいかすために」という視点を加味することができ、より中身の濃いガイドブックになりました。

TEACCHプログラムは、単なる一つの療育の方法や自閉症の人たちへの接し方を指すものではありません。私たちが自閉症の人たちと社会で共に暮らすための「社会的な支援のシステム」を指すものです。そしてそこには、「自閉症の人たちをより理解すること」こそがすべての基本なのだという哲学があります。このガイドブックの中にも何度も登場する「自閉症の人たちの文化」という言葉には、彼らをいかに尊重し、社会の一員としてどのように共に暮らしていくかというTEACCHの基本姿勢が凝縮されています。そしてこのことは、自閉症の人に限らず、すべての人がこの社会でいかに認められ、尊重されて生きていくかというノーマライゼーションの思想にも行きつけます。

このガイドブックがTEACCHのすべてを語ることはもちろんできません。しかし、日本の療育者が現地で体験したことを持ち帰り、いかに実践しているかということを知ることが大いに参考になることは間違ひありません。

TEACCHプログラムを実践中、またはTEACCHプログラムの世界をこれからぞいてみようという方に活用していただければ幸いです。

目 次	
第1章 TEACCHとノーマライゼーション	1
1 ノーマライゼーション—— 1	
2 インテグレーション—— 2	
3 自閉症の子どもたちにとって—— 2	
4 TEACCHのスタンス—— 3	
5 自閉症の文化への貢献—— 4	
第2章 診断と評価	5
1 診断	
1 診 断—— 5	
2 診断前—— 5	
3 診断の日—— 6	
4 CARS—— 8	
5 診断中—— 8	
6 親からの情報収集—— 9	
7 検査後のディスカッション—— 9	
8 親への説明—— 9	
9 事 例—— 11	
10 まとめ—— 13	
2 評価	
1 評 値—— 14	
2 評価の意味—— 14	
3 フォーマルな評価—PEP-RとAAPEP—— 15	
4 インフォーマルな検査—— 19	
5 おわりに—— 20	
第3章 構造化の理解と実際	21
1 構造化が必要な理由と概念	
1 「構造化（ストラクチャー）」についての理解—— 21	
2 いざ「構造化（ストラクチャー）」！—— 25	
2-1 構造化の実際—幼児	
おしまコロニー「つくしんぼ学級」の場合—— 32	
2-2 構造化の実際—学齢	
佐賀大学附属養護学校の場合—— 40	
2-3 構造化の実際—成人	
横浜やまびこの里「東やまた工房」の場合—— 45	
第4章 どこでも役立つインディペンデント・タスクの実例	57
1 はじめに—— 00	
2 自立課題（インディペンデント・タスク）の定義—— 57	
3 自立課題（インディペンデント・タスク）入門—— 58	
4 自立課題（インディペンデント・タスク）の事例集—— 66	
第5章 コミュニケーションプログラム	73
TEACCHのコミュニケーション指導—— 73	
第6章 余暇スキルとレジャー	77
1 余暇スキルとレジャー—— 77	
2 社会的な活動の練習—— 83	

第1章

TEACCHと ノーマライゼーション

1 ノーマライゼーション

ノーマライゼーションはデンマークのバンクミケルセンやスウェーデンのニルジエなどが提唱し、またアメリカではウォルフェンスバーガーが唱え北欧と北米で発展した近代福祉の根幹を担う理念です。ノーマライゼーションをそのまま訳し、正常化・常態化ととらえると「障害者の障害を取り除いて普通にする」という誤解が生じてしまうので、日本でもそのままノーマライゼーションという言葉が使われています。

しかし、この言葉は解釈の仕方によってさまざまな意味があり、また理念としてのみ掲げられていることが多いので、なかなか本来の意図を理解しにくいようです。

「障害のある人の暮らしを、障害のない人と同じような普通の暮らしになるように保障しよう」というのももとの考えですが、さらに発展させ、「障害があっても、障害のない人と同じように社会で暮らせるように手助けしよう」という考え方へ進んできました。

現在では「障害があることを理由に普通の暮らししができなくなるないように、法律

や制度、社会のシステムを整備していくことや、「障害のある人も障害のない人も、一緒に暮らしていくのがノーマルな社会であって、弱者（障害のある人や子ども・高齢者など）を排除しようとすることや社会的強者だけを中心とした社会はひずんだ社会であるから、弱者をも包み込んだ豊かな社会を形成していくこと」と積極的に解釈されて発展してきています。この概念は、WHO が1980年に定義した障害の3概念（疾病・機能不全・社会的不利）と合わせて障害者を社会的に受け入れる基本的な考え方となっていました。

2 インテグレーション

ノーマライゼーションは崇高な理念として掲げられているものの、それだけでは具体的な施策へ直接的につながってはいません。ノーマライゼーションが実際の施策として成り立つにはまず具体的に何をするかという指針が必要になってきます。

多くの福祉やヒューマンサービスを担う人々は、このノーマライゼーションの具現化に努力してきました。そして、具体的にどんな活動がノーマライゼーションを推進するかを示したのが、インテグレーションです。インテグレーションは統合と訳されていますが、ノーマライゼーションと同じように翻訳すると本来の意図が伝わりにくいことから英語がそのまま使われることが多いようです。

障害のある人たちの暮らしを変えていくときに一番大きな障壁となっているのは、社会の側、つまり障害のない人たちの意識であると考えられています。障害そのものは、教育・訓練や自助具の開発などで軽減できることがたくさんあります。しかし社会的な暮らしを支えることを考えたときに障壁になるのは、差別・偏見・誤解・無知・無理解といった社会の側のさまざまな要素

です。つまり、障害の克服や軽減、あるいは障害のある人の社会的な生活の保障には、こういった否定的な意識を取り除き、障害のある人と障害のない人の共生を目的とした社会の側の援助が必要不可欠なものなのです。

ところが、障害を理解しないまま、あるいは障害のことをまったく知らない状態、また障害のことを知る機会や障害のある人と接するチャンスがなければ、障害者への適切な社会からの支援がなされにくくことは明らかでしょう。無知・無理解は誤解を呼び、誤解は偏見を引き起こします。偏見は排除や差別を生み出し、障害のある人々は社会的に不利益や圧迫を被ることになります。

そこで、そうならないための方策としてインテグレーションがあるわけです。インテグレーションは、障害のある人とない人の暮らしが別々な社会で営まれていると、お互いにお互いのことが分からなくなってしまうから、最初から同じ環境で教育を受け、同じ環境で生活をしていくなかで相互理解を進めていくこうという考え方です。

3 自閉症の子どもたちにとって

こういった考え方に基づいて、共生の方向が模索されてきました。なかでもインテグレーションは大きな役割を果たし、学校で教育を受ける権利の保障が進められ、さらには、普通の学校で普通の教育を障害のない子どもたちと同じように受けられるよう、と運動は展開していきました。

この運動も前述したノーマライゼーショ

ンの考え方に基づき、障害のある子どもにとって社会的な不利益を少なくするために意図されたもので、社会の側の受け入れの姿勢を創り出すことに大いに貢献したことは言うまでもありません。しかしながら、インテグレーションは不十分な側面を持っていました。本来インテグレーションの意図は、インテグレーションされた環境で生

活するために必要な援助を、一人ひとりの障害に合わせて、個別的に、十分に保障するということであり、援助が個別化されてはじめてその意味が出てきます。年齢や発達の段階、個別のニードに合わせてインテグレーションされた環境、最大のパフォーマンスで教育が受けられるように設計されたものであれば問題はまったくありませんでした。

ところがインテグレーションは、融合、融和、共生、共存といった側面だけが現実には強調されて、個々のニーズへの対応は不十分なまま進められてしまいました。簡単な言葉に置き換えると、個別の障害の理解や一人ひとりへの配慮は不十分なまま、物理的に同じ環境を共有することだけが起こってしまったのです。

自閉症の子どもたちにとっては、これは大変不幸なことでした。自閉症という障害が正しく理解されずに、個別の問題にアプローチしないまま、物理的な場の共有だけ

が進められて、そのことだけが目的にすり替わってしまうと、適切な教育が受けられなくなってしまうことになってしまいます。自閉症の子どもたちにとっては、適切な教育を受けることができれば、学習の向上や社会性の向上がもっと高く見込まれたであろうに、適切な教育を受ける権利を阻害されて、結果として十分な教育がされずに社会的不適応を起こしているといつても過言ではありません。

繰り返しますが、インテグレーションの考え方はノーマライゼーションを具現化する重要な要素の一つです。そしてそれは、個別への配慮が十分にされた環境で、つまり、教育を受ける権利が十分に保障されてはじめて生きてくるものです。個別への配慮なしに物理的な場を共有するだけの混合では、自閉症の子どもたちの適切な教育を受ける権利が保障されているとは言い難い状況にあったのではないでしょうか。

4 TEACCH のスタンス

TEACCHの創始者エリック・ショプラーはこのことに着目して、「自閉症の子どもたちは、障害のある市民の権利保障の運動の渦にのみ込まれてしまって、一人ひとりの市民として適切な教育を受ける権利を阻害してきた人たちだ」と語っています。

これはインテグレーションの施策の中で、自閉症という障害への理解やその障害に合わせた教育の方法が充分に模索されてこないで、結果として社会的不適応の烙印を押された自閉症の子どもたちの声をとてもよく代弁したものでしょう。

自閉症の正しい理解と適切な処遇が行われれば、自閉症の子どもたちは、もっと豊かに社会的に暮らすことを TEACCH は

訴えているのです。

この本で述べられている、つまり TEACCH が教えてくれる自閉症の理解と、その理解に基づく療育や援助の組み立ては、本来のノーマライゼーションの考え方と根本的には同じものです。

現在進められているインテグレーションがその本来の役割を果たさないのであれば、自閉症という障害のある人たちのためには反論を唱えざるを得ません。

自閉症の子どもたちにとっての育つ権利を保障していくと考えるのであれば、適切な教育環境と教育の技術を持った教員の配置が必要になります。この適切な教育環境を考えたときに、現在のインテグレー

ションの場面においては自閉症の子どもたちは十分な配慮がなされているとは言い難い状況にあります。

TEACCHでは、一時期インテグレートされた環境から離れることがあっても、それは自閉症の子どもたちが真に地域社会での生活を手に入れるための早道であると考えています。TEACCHにおける一時期のインテグレーションからの離脱は決して隔離政策に基づいて意図されたものではなく、地域社会での豊かな暮らしを目指したものだ

と言えましょう。これは、理解されにくい自閉症という障害のある子どもたちの教育を受ける権利を保障しつつ、融合をめざした合理的、合目的的な方策だということが分かります。

これまで、自閉症は誤った考え方や不十分な理解に基づいて療育や援助の組み立てが行われてきました。TEACCHでは、正しい理解と、有効な療育・援助技術の開発の重要性を世界に訴えかけています。

5 自閉症の文化への貢献

ノーマライゼーションは、前述したように障害のある人たちの障害を取り除いて普通にすることでもなければ、障害のある人たちをただ単に社会の一部分に同席させるだけのことでもありません。ノーマライゼーションの本当の意味は、障害のある人も障害のない人も、すべての人が人として生きる権利を持ち、そのお互いの権利を認め合って生きていけるような社会を作ることだ、と説かれています。それは、個々の違いを認め尊重し、人と人とがお互いに歩み寄りながら社会を築いていくことだと言えましょう。

これまで社会は、障害のある人々に対して、社会への歩み寄りを求めてきました。つまり健常者中心、社会的強者中心の社会のルールがそこにはあり、あくまで社会的弱者は、そういった社会への参入や復帰だけが強く言われ、求められてきました。

TEACCHでは自閉症の人たちの持つ特徴を「障害」という言い方をせずに、「文化」という言い方をするようになってきています。これは、彼らの行動上の特徴を障害として捉えて否定したり治療の対象として考えるよりも、文化として捉え、積極的

な意味で肯定し、認めていくことが重要だと考えたからです。自閉症という障害を障害として否定するのではなく、文化として認め、彼らの文化と社会の文化との接点を見いだし、お互いにとって有益な歩み寄りを模索しようと考えたのです。

これは現在ある社会のルールに当てはめて良し悪しを論じることの無意味さを含んでおり、自閉症の人たちの行動特徴を認め、既存の社会との架け橋に私たち療育者や援助者がなるべきことを示唆しています。もちろんこういった考え方は自閉症だけにあてはまるではなく、普遍的な真理として今後の障害福祉を醸成していく大事な考え方になるでしょう。しかし、現在はまだ、やっとその緒についたばかりです。

TEACCHにおけるノーマライゼーションとは、自閉症という障害を認め、さらにそれを文化として尊び、既存の社会との融和をはかることを意味しています。

私たちは、この文化の架け橋たることを目指しているのです。

(ふじむらいづる)